

氏 名 山田 康弘

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第177号

学位授与の日付 平成19年9月28日

学位授与の要件 学位規則第6条第2項該当

学位論文題目 人骨出土例に基づく縄文時代墓制と社会の研究

論文審査委員	主査	教授	春成 秀樹
		准教授	藤尾 慎一郎
		教授	西本 豊弘
		教授	新谷 尚紀
		准教授	松村 博文（札幌医科大学）

## 論文内容の要旨

本研究は縄文時代における人骨出土例に基づきながら当時の墓制とそれから想定される社会のあり方について考察を加えたものである。

まず、人骨出土例の検討からは、当時の墓制について以下のような知見を得ることができた。

縄文人の埋葬姿勢には、大局的にみて、四肢および腰を強く屈曲させる地域、膝関節を強く屈曲させる地域、時期を追うごとに伸展化していく地域、屈葬と伸展葬の二つに分化してしまう地域の四つの地域性が存在する。また、このあり方は時期によっても、各々の遺跡間によっても変化する。特に遺跡内における埋葬姿勢のあり方には、三つのパターンが存在する。個々の埋葬姿勢には、年齢段階・性別・埋葬地点の差・装身具や副葬品の保有状況などによって統一化・偏向化されたような形跡は存在しない。

縄文人の埋葬された土壌の規模は、基本的に年齢段階が上がるにつれて大きくなっていく。ただし、壮年期段階を超えるとその大きさには顕著な差はなくなる。これは、壮年期以降、被葬者の成長が停止し、身体が大きさが変化しなくなることと関係がある。また、土壌の規模は埋葬姿勢、特に膝の角度や腰の角度によって変化する。したがって、前述の埋葬姿勢のあり方と考え合わせるならば、土壌の規模には地域性が存在することになる。さらに土壌の規模は同じ埋葬姿勢の場合、性別によっても異なる場合が存在する。これは男性と女性の体格差に起因するものである。したがって土壌の規模は、被葬者の埋葬姿勢と年齢段階、性別、体格によって決められていたといえることができる。

縄文時代の墓域には個別墓が集中して検出される地点、埋葬小群が存在する。この埋葬小群は偶然に形成されたものではなく、遺伝的関係性を持った人々が一定の区画を定めて埋葬された結果、形成されたものである。その占守・用益の主体としては、規模や性別・年齢構成から推定して、核家族を内包する小家族集団、おそらく世帯などを比定することができる。

埋葬人骨の頭位方向は、一定の方角に偏向する場合がある。また、年齢や性別によって異なる場合も存在する。しかし、抜歯や頭蓋形態小変異のあり方といった生前付加属性および可視属性、遺伝的形質とあわせて比較検討してみると、これらの属性間においては相関する傾向性を見いだすことはできず、出自や双分組織などの社会構造と頭位方向を直結させて解釈する研究が成立する余地はほとんどない。また、頭位方向が決定されるにあたっては、遺跡周辺のランドマークを意識していたり、遺跡が立地する地形に規制される場合も存在した。このことは、頭位方向は各遺跡によって独自に決められていたとする解釈を可能とする。

縄文時代には、各種の骨病変を引き起こす病気や怪我に対する呪術的な医療行為の一環として、装身具を着装する風習が存在した。また、装身具は年齢段階や性別等によって着装できる種類が決まっており、年齢個人の経験値や社会的な位置関係によってその着装状況は多様に変化した。特に装身具の着用は集落構成員としてその運営の中核を担ったであろう壮年期・熟年期段階に多くみられ、子供や老人にはさほど多くは存在しない。このことは年齢集団や年齢階梯制の存在を強く示唆する。

またこの時代には、大人と子供を区別するという大きな社会区分の他に、年齢段階によって個人の集団内における社会的位置付けが変化していく社会が存在した。死産児は土坑墓へ、生産であったが新生児早期死亡例は、再生を祈願されて土器棺内に埋葬された。出生後無事に成長した乳児期までの子供は、基本的に母親のもとで生活し、2歳位で離乳する。その後、幼児期になると、男の子は男性と、女の子は女性と過ごす機会が

多くなり、様々なジェンダー教育が開始された。また、それとともに集落構成員として認知されるようになり、労働力の分担者としても扱われるようになった。そして、通常は12歳から16歳頃に成人儀礼を行ない、大人の仲間入りをした。また、成人後には婚姻関係を結び、女性は早ければ17歳頃には母親となった。その後、壮年期と熟年期を通して、集落構成員の中核を担い、老いを感じると生業活動や社会的活動の第一線から退き、次第に活動領域を縮小させながら、やがて死亡していったものと推察される。縄文時代には高齢者が、装身具の佩用、埋葬時におけるエラボレーションのあり方などにおいて、ことさら特別扱いされていた証拠は存在しない。これは長老など、「力を持った高齢者」の存在に対してネガティブである。

縄文時代には、一度埋葬した遺体を掘り起こし、これを集積してまた一つの土壌に合葬するという風習が存在した。これは、複数の小家族集団がその相互の関係性を撤廃し、新たに合同して一つの集団を創出する時に行なわれた特殊な儀礼であった。このような多数合葬例は集団統合のモニュメントとして機能し、共通する始祖を祀る祖霊崇拜の拠り所となった。このことは、集団内においては紐帯の確認と強化を促進させ、集団外に対しては自らのアイデンティティを自覚させることにつながった。また、その場合、集落を構成する基礎単位である世帯ないしは世帯を内包する小家族集団は、より大きな人間集団として再編されることになった。それが直接的な血縁関係を有するリネージなどを超越し、より地縁的・経済的・社会的な側面を有するクランなどに比定されるものであったということは想像に難くない。

縄文時代には、被葬者の死因によって葬法を変える風習があった。特に、出産時の妊産婦死亡例や死産児・新生児早期死亡例など、特殊な死亡例ではその傾向が高く、異常死というものに対して一定の呪術的・観念的対応が行なわれていたことがわかる。また、このようなことは通常他界観が成立していないと起こりえないことであることから、縄文時代にはすでに複雑な他界観が成立していたと推察される。

縄文時代には、特定の子供が多数の装身具や副葬品と共伴するという事例は存在しない。このことは、階層制の存在を主張する研究者がその指標として挙げる子供の厚葬・子供への投資が存在しなかったことを裏付けるものであり、縄文時代に世襲的な階層化社会が存在したことに否定的である。

一遺跡内における縄文時代の人骨には、抜歯型式などによって筋肉の発達度合いや身長差などが異なるというような形質差は存在しない。このことは、階級や階層の存在を暗示する食養仮説や、労働分化の存在に対して否定的である。

これらの知見をもとに、北海道カリンバ3遺跡や高砂貝塚、青森県三内丸山遺跡、茨城県中妻貝塚、岡山県津雲貝塚における墓域のあり方を検討し、縄文時代には世襲的な権力の相続が考えられないこと、したがって階層化社会の存在には賛成できないことを主張した。また、縄文時代には母系的な社会が存在し、関東においては中期末から後期にかけてこれが急激に父系的な社会へと変化したこと、西日本では晩期にいたるまで基本的には母系的な社会が存続していたと考えられることを指摘した。また、本研究を通して筆者は、縄文時代の墓制と社会を考えるにあたっては、考古学的な知見と人類学的な知見を合わせて考える方法が極めて有効であることを提示した。

## 論文の審査結果の要旨

山田康弘の学位請求論文「人骨出土例に基づく縄文時代墓制と社会の研究」は、大正時代以来、積み上げられてきた縄文時代人骨の資料と研究をふまえ、考古学の立場から「縄文時代の墓制と社会」にアプローチしようとしたものである。これまで人類学者は人骨の形質から縄文人の系譜や地域性を解明するのが主流であって、墓制や社会にたいする関心は浅かった。その一方、考古学者は人類学者の観察所見だけを頼りにして墓制や社会の解明にあたってきた傾向がつよい。

山田は、考古学出身の研究者であるが、人類学関係の博物館に3年間勤務し人骨を観察する経験を積み、本論文では縄文人骨2490体から得たデータにもとづく実証的な研究を目指している。調査項目は、人骨出土状況、性・年齢・出産経験・装身具の有無、頭骨の形態小変異などにおよび、とくに人骨の属性については1体1体自らの観察眼で人骨を見直している。その結果、性や年齢などが不明であった人骨の性質が判明し、この方面の今後の研究の基礎的なデータを構築している。データは一覧表にして論文の巻末に付しているが、それだけで全体の1/3に達する労作である。

現在、縄文考古学の第一線では、婚姻後の居住集団や出自はどうか、階層化された複雑な社会であったのかなど社会構造について、文化人類学や比較考古学の立場からの問題意識のもとに議論がおこなわれている。そのさいに、分析の対象になる第一が墓制であるが、北アメリカ北西海岸先住民社会の諸現象を基準に用いて、山田らの整理したデータを援用して、階層社会の存在を主張しているケースがある。それにたいして、山田は自ら調査した人骨等の詳細なデータを使って検討し、彼らの示す根拠がきわめて恣意的であることを明らかにし、逆にその存在に否定的である。すなわち、階層論者が子どもの厚葬、子どもへの投資を基準にあげるのにたいして、特定の子どもの装身具や副葬品が伴う事例が存在せず、その基準を満たしていないことを論じている。さらに、縄文後・晩期における抜歯の二型式の意味について、身長、筋肉の発達度との相関関係の有無を調べ、それが存在しないことから、抜歯の二型式に従事する労働の違い、すなわち上位階層と下位階層のちがいとみることはできないと指摘する。

出土人骨の年齢階梯と埋葬時の取り扱いから縄文人のライフ・ヒストリーを山田は復元し、長老者が首長になるという通説を否定しているのも説得力がある。

本論文を構成する他のテーマについても、他の研究者の意見をとりあげ、自らの人骨調査の結果にもとづいて総合的に検証し、肯定できるところと否定すべきところをはっきり区別している。

その一方、出自など社会諸制度が考古資料にどのような形で表現されているのか、出土人骨や墓地のあり方からどのように追究していくか、埋葬小群や抜歯二型式のとらえ方など山田独自の方法と見解の提示は不十分である。

山田の研究においては、資料操作、分析、結論とも概ね堅実で妥当である。その反面、既往学説を否定したあとの論の展開に物足りなさを感じるところが多々あり、その結果、縄文社会のとらえ方が平板的になっているように見える。学界未解決の大きな課題に迫るためにも、方法をさらに鍛え、縄文集落の分析もおこない、弥生・古墳時代の人骨と墓制の分析を進め、縄文社会論を今後いっそう発展させていくことを期待したい。

以上、山田康弘の学位請求論文にたいして審査委員一同、本論文が博士(文学)にふさわしい優れた研究内容をもっていることを認める。